

# 韓国における「歴史叙述」の問題

——林泰輔『朝鮮史』の受容を中心に——

金 仙 熙

## A Problem of 'historical description' in Korea

—— Focused on the reception of *Chosenshi* by Hayashi Taisuke ——

KIM Sunhee

In Japan, the establishment of the modern science of history that advocates the cause of positivism has played a significant role in increasing interest in Korean history. *Chosenshi* (*Korean History*), written by Hayashi Taisuke from a Korean perspective, is one of the earliest studies of its kind, providing a new style of historical description. The book was translated into the Korean language and published by Hyon Chae under the title *DongGookSaRyak*.

However, *Chosenshi* became a target for harsh criticism from Korean thinkers of that time who advocated nationalism. In the study of Korean history, in which a major challenge was to overcome the historical perspective of colonization after Korea's decolonization, *Chosenshi* was criticized for being filled with a "historical perspective of colonization," rather than praised as the establishment of a modern history description. In South Korea today, however, *Chosenshi* has recently drawn renewed attention in discussions regarding "historical description." A look at the history of the acceptance of *Chosenshi* shows how the book has raised various questions, including arguments about the results of studies on ancient history in South Korea.

キーワード：近代歴史学、植民史観、歴史叙述、民族主義史学

### はじめに

近代日本の朝鮮史に対する関心は、1869年国史校正局が設置され、国史編修の立場から日本史と関連して始まった朝鮮史研究として現れた。また1883年に広開土王碑文調査が行われ関心がより高まった。1887年東京帝国大学に史学科が設置されたことのもつ一つの意味は、実証主義を提唱したランケの弟子であるリース（Ludwig Riess）が主任として赴任し、西洋の近代史学の方法を取り入れることではじめて近代歴史学が成立したことである。続いて1889年には東京帝国大学に国史科が設置され、以降『史学雑誌』を通じて、朝鮮史関連研究の成果が活発に発表された。当時の一連の朝鮮史関連の著作をとりあげてみると、菅原竜吉編『啓蒙朝鮮史略』、東条保編『朝鮮誌略』（1875年）、総生寛編『朝鮮新論』（1876

年)、太政官修史官『日本史略』(1877年)鈴木信仁編『朝鮮紀聞』(1885年)、重野安繹編『国史眼』(『日本史略』の改定版、1891年)、林泰輔『朝鮮史』(1892年)、吉田東伍『日韓古史断』(1893年)、西村豊『朝鮮史綱』(1895年)、菊池謙讓『朝鮮王国』(1896年)、恒屋盛服『朝鮮開化史』、信夫淳平『韓半島』、林泰輔『朝鮮近世史』(1901年)と続々刊行された。以後、1908年に満鉄地理歴史調査室が設置され本格的な満鮮史研究がなされ、以降1910年日韓併合となり、より緻密な朝鮮史研究が行われた経緯は紙面の都合上省略する。上記の一郡の書物の内、私が注目したいのは林泰輔の『朝鮮史』である。この著書は近代的歴史研究の成果を適用して書かれた最初の朝鮮史研究書である。近代的歴史叙述は経史一体の中世史学から歴史学が学問的に独立することから出発する。韓国史における近代的歴史叙述の成立をめぐる議論で林泰輔の『朝鮮史』は欠かせないものである。本稿では韓国の歴史叙述の問題を考える際、林泰輔の『朝鮮史』が近代以来いかに受容されてきたか、その受容の様子を考察することを目的とする。

## 1. 近代韓国における歴史教育

### 1) 韓末の歴史教育

韓国における近代的教育は1885年から始まる。最初の近代的学校で培材学堂が設立され<sup>1)</sup>、梨花学堂、貞信学校など外国人宣教師らによる私立学校と、政府の育英公院が設立された。これらの学校では大体歴史教育が実施されたが、自国史中心ではなく各国歴史といい、西欧の歴史と文化の紹介に重点がおかれた<sup>2)</sup>。近代的教育が一般化されるのは1894年の甲午更張がきっかけとなり、この時期にいたると各級学校の官制が発表され、それに従い国家による官立学校が設立された。また法令で定められた教育課程が作られ近代的教育の枠が立てられた。一方『独立新聞』をはじめに言論機関もまた歴史にかんする記事や論説を多数発表し、啓蒙的立場から一般国民に歴史的教養と知識を伝えようとした。私立学校を中心に西欧を紹介する次元に止まっていた歴史教育が、近代国民国家の国民意識の形成という目的をもって変化しはじめたのである。当時の各学校の官制からも歴史教育の変化が窺える。1895年4月に発表された漢城師範学校の官制には教科目に歴史が含まれ、その内容は「本国及び万国歴史」となっている<sup>3)</sup>。当時最高教育機関であった成均館も「本国史」を正規科目として採択し、月課にも歴史科目が含まれ<sup>4)</sup>、歴史教育が漸次拡大していく様子が分かる。また1895年7月小学校令の教授要目にも本国歴史と外国歴史が科目として含まれている。さらにまもなく発表された小学校の校則大綱には、歴史教育の目的、

1) 最初の近代式学校を1883年設立された元山学舎とみなす見解もある(愼鏞厦(1974)「우리나라 最初の 近代学校 設立에 대하여」『韓国史研究』10、p.203)。しかしこれは外国勢力の侵略に対応するため徳源邑民と徳源府使が合力したもので、教育内容においては以前との差別性はあまり見られなく、また地方に所在した点から大きな意義はないと思われる。

2) 外国人教師がアメリカの教科書をハングルで訳した訳書を教材にしたり、教師によって教科目の設定・実施時間の変動があるなど、一定のカリキュラムから教育がなされたのではない。金興洙(1981)「韓末 歴史教育 및 教科書에 관한 研究」『歴史教育』29、pp.45-46

3) 漢城師範学校規則(1895. 7 学部令 1号、官報 121号)

4) 成均館 經学科規則(1895. 学部令 12号、官報 135号)

方針や方法まで提示されるが<sup>5)</sup>、その内容は「国民たる志操を養うこと」即ち、国民としての心構えを持ち、民族の団結をなそうとするものであった。特に小学校における歴史教育が詳細に規定されたのは、一般国民の基本的教養と知識を教育する、最も一般的な教育機関としてみなされた小学校において国史への認識を強調し、国民的愛国心を高揚する必要性があったためと理解できる<sup>6)</sup>。しかしながら1905年第2次日韓協約の締結により、韓国の教育は日本帝国の植民地教育の準備過程と変化した。1906年師範学校令の発表後、各種の学校令や施行規則が発表され、1895年以降定められた諸法令は全面改訂あるいは無効となった。新しい法令の特徴は国民精神を高める科目の縮小、外国語科目の増加、教科書の検定・使用・発売の制限に要約される。特に小学校では歴史・地理教科の時間を設けず、基本教育時間に関連事項を説明するようにして<sup>7)</sup>、事実上歴史教育は禁止された。

## 2) 韓末の歴史教科書編纂

前にもふれたように韓末の歴史教科書は1895年に至ってから編纂された。1885年前後に近代学校が設立され、近代的教育が実施されたことを考えると、相当遅れたのだが、その理由は当時の執権層の歴史教育の必要性に対する認識の不在、また歴史教科書を執筆できる専門家の不足によると思われる。当時の教科書とは現在の教科書が持つ意味よりはもっと深く、専門書と言われてもいいものであった。1895年から1905年の間には外国歴史書が多数翻訳出版された。『波蘭末年戦史』（著者不明、1905年『大韓毎日申報』連載）、『埃及近世史』（張志淵訳、1905年）、『美国獨立史』（玄陰、1899年）などは弱小民族の亡国や植民地から独立国家に発展していく内容で、当時外からの干渉や侵略の脅威が高まる中、国民の警戒心を呼び起こすものであった。これは前に述べたように、当時の歴史教育の目的に由来するであろう。

国史教育をつうじて民族意識、国民意識を形成・鼓吹する必要性が高まる時代的雰囲気は、歴史教科書の編纂にも反映された。『独立新聞』が他国事情に優先して「わが事情」の教育を強調し<sup>8)</sup>、朝鮮王朝の武臣である李舜臣・趙憲・林慶業などを取り上げ、「わが民族の優秀性」を知ることを力説した<sup>9)</sup>。中国史中心の教育から脱皮し、国史教育に重点をおくことで民族を主体とする近代教育思想の基本方向を確立しようとしたのである。それに従い歴史教材の編纂も要請された。

軍国機務処は1894年6月28日「議政府官制」で、編史局を設け本国の歴史編集を決議し、「各衙門官制」で近代教育史上初めて教育行政を担当する学務衙門を発足させた<sup>10)</sup>。学務衙門には6個の専担局を置き、そのなか編輯局は国文の綴字と各国文の翻訳、教科書の編集を管掌し、参議一人、主事二人の官吏

5) 学部令 3号 (1895. 8 官報 138号)。またこの時期の各級学校の授業時数に関しては、崔敏鎬 (1986)「開花期 国史教育의 実態研究-玄米『東国史略』과 林泰輔『朝鮮史』比較分析을 중심으로」『李元淳教授華甲記念史学論叢』教学社、pp.983-986、に詳しい。

6) 金興洙、前掲論文、p.49

7) 学部令 22号 (1906. 9 官報 3549号)

8) 『独立新聞』、1896. 5. 30

9) 『独立新聞』、1898. 3. 8

10) 『高宗実録』、1894. 6. 28

が配属された。それによって編史もなされた。1895年3月内閣衙門の各道への訓示をみると、まず、本国史と本国文を教えること、明・清を尊崇せず「わが開国起源」を使用することが強調されている<sup>11)</sup>。これは中国から文化的独立意識を表明したものだが、それに比べ対日本への意志はあまり見られない<sup>12)</sup>。この時期の対中国意識、対日本意識の差異である。

以降、学務衙門は1895年3月25日から学部と改名され、「学部官制」の独立法律体系によって規定された。これは議政府が内閣へ変わり、「内閣官制」が制定されることと軌を一にして、改革を標榜する政治勢力が登場した政治状況とも連動していたのである。

このように、近代教育と関連した制度的整備をなされたが、教科書編纂においては人的・物的資源の不足、教科書編纂経験のないことから日本の先例が参照されたり、日本人の参与は不可避なことであった。特に国史の場合、朝鮮後期の「実学派」以来歴史研究はほとんど断絶した状態だったので、教科書といっても通史的叙述はもっと難しかったと思われる。こうした点は最初の国語教科書である『尋常小学』と最初の教育学教科書である『新撰教育学』が日本人との協力のもと作られたことから分かる<sup>13)</sup>。

以上のことをまとめてみると、韓末歴史教科書の編纂は中国からの克服をつうじた民族・国民意識の涵養を目的にした近代歴史教育の必要性から始まった。しかしそれを担当する力量の不足から結局日本の干渉のもとで作られた。こうした過程で日本に対する批判的認識は保ち難く、当時教科書編纂の担当者であった金澤栄や玄采もまたこうした背景から自由ではなかったと思われる。それはまた彼らの歴史叙述において日本歴史学への憧れとして現れる。次の表1は1895年から1910年まで刊行された歴史教科書の目録とその目次である。

表1 〈1895～1910年刊行された歴史教科書〉

書名	編纂者	年度	叙述時期	目次	叙述体制	その他
朝鮮歴史	学部	1895	檀君 ～1893	檀君、箕子、三韓、衛滿、四郡、二府、三国、高麗、朝鮮	編年体	『朝鮮歴代史略』の要約（国漢文）
朝鮮歴代史略			檀君 ～1893	檀君、箕子、馬韓、三國、統一新羅、統一高麗、朝鮮	綱目編年体	漢文
朝鮮略史十課			檀君 ～朝鮮	檀君、箕子、三韓、衛滿、四郡、二府、新羅、高句麗、百濟、高麗、朝鮮		国漢文
東国歴代史略	学部 (金澤栄)	1899	檀君 ～1392	檀君、箕子、(衛滿)、馬韓、統一新羅、統一高麗	編年体	漢文
大韓歴代史略			1392 ～1899	朝鮮	編年体	『東国歴代史略』の続きとして刊行（漢文）
東国歴史	玄采		檀君 ～1392	檀君、箕子、衛滿、馬韓、統一新羅、統一高麗	編年体	『東国歴代史略』の訳述（国漢文）

11) しかし第87条には、日本が我が独立自主を助ける事情を知らせるとして、日本帝国の的確な把握は見られない。

12) 朴杰淳（1998）『韓国近代史国史研究』、国学資料院、pp.38-39

13) 姜允浩（1973）『開化期의 教科用圖書』、教育出版社、p.139



歴史輯略	学部 (金澤栄)		檀君 ～1392	(檀君)、箕子、馬韓 (衛滿、辰韓、弁韓、四郡二部、三国)、三国、統一新羅、(渤海)、統一高麗	編年体	漢文
大東歴史	崔景煥	1905	檀君 ～馬韓	檀君、箕子、馬韓 (篡賊=衛滿、僭国=新羅、高句麗、百濟)	綱目編年体	漢文
大東歴史	鄭喬		統一新羅	統一新羅	綱目編年体	漢文
大東歴史略	国民教育会		檀君 ～1392	檀君、箕子、馬韓 (新羅、高句麗、百濟)、新羅 (高句麗、百濟)、統一高麗	編年体	国漢文
大韓歴史上 (ハングル)	H. B. Hulburt・呉聖根	1906	檀君 ～1392	檀君、箕子、馬韓、三国 (馬韓)、統一新羅、統一高麗	編年体	国文 (ハングル)
新訂東国歴史	元泳義・柳瑾		檀君 ～1392	檀君、箕子、(衛滿、高句麗) (馬韓、百濟) (辰韓、新羅) (弁韓、駕洛)、統一新羅、統一高麗、大韓	編年体	国漢文
東国史略	玄采		檀君 ～1895	檀君、箕子、三韓、三国、統一新羅、泰封、後百濟、渤海、高麗、朝鮮	新史体*	国漢文
初等大韓歴史	鄭寅琬		檀君 ～1907	檀君、箕子 (衛滿)、三韓、三国 (新羅、高句麗、百濟)、五国 (駕洛、伽倻、渤海、泰封、後百濟)、高麗、朝鮮	新史体	国漢文
初等本国略史	柳瑾	1908	檀君 ～1907	檀君、箕子、(衛氏、四郡、高句麗) (馬韓、百濟) (辰韓、新羅) (弁韓、駕洛)、統一新羅、(後百濟) (泰封)、高麗、朝鮮、大韓	新史体	国漢文
初等大韓歴史 (ハングル)	趙鍾萬		檀君 ～1907	檀君、箕子、(衛氏、四郡、高句麗) (馬韓、百濟) (辰韓、新羅) (弁韓、駕洛)、統一新羅、(後百濟) (泰封)、高麗、朝鮮、大韓	新史体	国文 (ハングル)
初等本国歴史	安鐘和		檀君 ～1907	檀君、箕子、(衛氏、四郡、高句麗) (馬韓、百濟) (辰韓、新羅) (弁韓、駕洛)、統一新羅、(後百濟) (泰封)、高麗、朝鮮、大韓	新史体	国漢文
初等本国略史	興士団	1909	檀君 ～1907	檀君、箕子、三韓、新羅、高句麗、百濟、統一新羅、統一高麗、朝鮮	新史体	国漢文
初等大東歴史	朴晶東		檀君 ～1907	檀君、箕子、馬韓 (弁韓、辰韓) 新羅、高句麗、百濟、駕洛、統一新羅、統一高麗、朝鮮	新史体	国漢文
新撰初等歴史	柳瑾	1910	檀君 ～1906	檀君、箕子、(衛氏、四郡、高句麗) (馬韓、百濟) (辰韓、新羅) (弁韓、駕洛)、統一新羅、(後百濟) (泰封)、高麗、朝鮮、大韓	新史体	国漢文
国朝史	元泳義		1392 ～1909	朝鮮王朝	編年体	国漢文

出典：『韓国開花期教科書叢書』（都冕會（2008）「韓国近代歴史学創出과 通史体系의 確立」『歴史外 現実』70、から再引用、金興洙（1983）「韓末国史教科書編纂」『歴史教育』33、から補充）

\*新史体とは従来の編年体とは違って、近代的方法を取り入れた歴史叙述方法を指す。

## 2. 韓国における林泰輔『朝鮮史』受容の様相

林泰輔（1854－1922）は、下総香取郡（千葉県）出身の歴史学者である。帝国大学卒後、東京帝大助教授を歴任した。また東京高師教授などをつとめた。大正5年、著書『周公と其時代』で学士院賞恩賜賞した。著作に『漢字要覧』、『亀甲獣骨文字』、『四書現存書目』、『上代文字の研究』、『朝鮮史』、『朝鮮近世史』、『朝鮮通史』があり、朝鮮関連論文として『史学雑誌』掲載した「加羅の起源」（1890）、「坪井九馬三の『古朝鮮三国鼎立形勢考』を読む」（1893）「加羅の起源続考」（1894）、「朝鮮史籍考」（1896）

などがあり、また『人類学会雑誌』に発表した「朝鮮古代諸王卵生の伝説」がある。韓国の近代歴史叙述に大きい意味をもたらした『朝鮮史』は全5巻で、目次は以下の通りである。また1901年の『朝鮮近世史』とを合わせて1912年『朝鮮通史』を記した。彼の『朝鮮史』が多く知られたのは学部の編集局で働いた玄采が『東国史略』という題で『朝鮮史』を訳したことによる。林の著書の目次をみると以下のようなものである。表1の『朝鮮史』と表3の『朝鮮近世史』の内容を合わせたものが表4の『朝鮮通史』である。

表2 〈『朝鮮史』松村九兵衛(1892)全5巻(韓国学中央研究所蔵本)〉

第一巻	第2巻・第3巻	第4巻	第5巻
<b>第一編 総説</b> 第一章 地理 第二章 人種 第三章 歴代沿革ノ概略及ビ政体  <b>第二編 太古史</b> 第一章 開國ノ起原 第二章 箕氏ノ東来及ビ衰替 第三章 衛氏ノ興亡及ビ郡県 第四章 三韓ノ建国 第五章 政治及ビ風俗	<b>第三篇 上古史</b> 第一章 三国ノ分立 第二章 三国ノ中世 第三章 三国ノ争乱及ビ新羅ノ隆興 第四章 隋唐ノ来侵 第五章 百濟高句麗ノ滅亡 第六章 駕洛任那及ビ耽羅 第七章 支那及ビ日本ノ関係 第八章 新羅ノ統一 第九章 新羅ノ衰亡 第十章 泰封及ビ後百濟 第十一章 渤海  <b>第3巻</b> 第十二章 制度 第十三章 教法文学及技芸 第十四章 産業 第十五章 風俗	<b>第四篇 中古史</b> 第一章 高麗太祖ノ創業及ビ成宗ノ治 第二章 康兆ノ乱及ビ契丹ノ関係 第三章 女真ノ役 第四章 李資謙及ビ妙清ノ変 第五章 鄭李ノ兇逆 第六章 崔氏ノ専横 第七章 蒙古ノ入寇及ビ日本ノ役 第八章 元室ノ専制 第九章 辛氏ノ兇逆及ビ繼位 第十章 北元及ビ明ノ関係 第十一章 倭寇 第十二章 高麗ノ滅亡	第十三章 制度 第十四章 教法 第十五章 文学及ビ技芸 第十六章 産業 第十七章 風俗

表3 〈『朝鮮近世史』(1901)目次〉

第一章	朝鮮の基業
第二章	世宗の治蹟
第三章	世祖の篡立
第四章	大典の制定
第五章	士林の禍及び外交
第六章	壬辰の亂
第七章	滿洲の入寇及び講和
第八章	文化及び黨争
第九章	外戚及び王族の専恣
第十章	歐米及び日清の關係
補遺	日韓の併合

表4 〈『朝鮮通史』(1912)目次〉

前紀	古朝鮮三國高麗時代
第一章	古朝鮮の開發
第二章	三國の分立及び統一
第三章	高麗の興亡
正紀	李朝時代
第四章	朝鮮太祖の創業
第五章	太宗世宗の治績
第六章	世祖の事蹟及び大典の制定
第七章	士林の禍
第八章	壬辰以前の外交及び内政
第九章	壬辰丁酉の亂
第十章	滿洲の入寇及び朝鮮の降服
第十一章	黨派の軋轢
第十二章	文化の復興
第十三章	外戚及び王族の専恣
第十四章	外國の關係
第十五章	日露衝突の影響及び日韓の併合

## 1) 玄采（1856-1925）の受容

玄采は1856年朝鮮王朝の代表的訳官家門であった川寧玄氏家で出生、号は白堂である。1873年訳科の漢学に合格したが、職を得ず、1892年釜山港監理署の訳官となった。川寧玄氏家門は当時もっとも多い倭学合格者を輩出した家門であった。以降釜山港書記官に昇進し、甲午改革以降 統理交渉衙門の主事と抜擢した。また1895年新設された学部傘下の外国語学校副教官、漢城師範学校副教官をつとめた。1899年玄采は学部編集局委員として主に翻訳業務を担当し、金澤栄執筆の『東国歴代史略』を要約し国漢文で読みやすくした小学校用国史教科書である『東国歴史』の編纂を担当した。1907年学部から解任されて<sup>14)</sup>以降には著述活動に専念し、『幼年必読』などの歴史著述を残し、自ら印刷所を運営して歴史・地理関連の著書を刊行した。1915年には『毎日新聞』に韓日両国が一家となったといい、任那日本府説・神功皇后三韓征伐説などを前提に韓日交流史を7回に渡って連載した。また日本の植民地支配を肯定する文書を掲載したこともあった。3.1運動以降には親日高級官僚らと書画協会で活動し、1922年12月に朝鮮史編修会の前身である朝鮮史編纂委員会にも参加した。

金澤栄の『歴史輯略』を1905年までの代表的な開花期教科書であるとするならば、玄采の『東国史略』は、1905年以降刊行された国史教科書のなかで近代歴史学あるいは近代歴史意識がもっとも多く内包されたものとして評価される<sup>15)</sup>。

『東国史略』は林泰輔が1882年古代から中世までの内容で著した『朝鮮史』を台本として玄采が1906年訳述したものである。林泰輔の『朝鮮史』が西洋史から学んだ近代的歴史叙述方法を適用して新しい体制と新しい観点から韓国史を叙述したことのもつ意味は大きい。その近代的歴史叙述方法が以降韓国における歴史叙述の基準となったからである<sup>16)</sup>。玄采は『東国史略』の「自叙」でその訳述の動機を、『朝鮮史』が新しい体制で、考証的であるためわが国の歴史を分明に理解できるように叙述されているからと述べた<sup>17)</sup>。彼は『朝鮮史』がもたらす意味をかなりの確に把握したのである。こういった理由で玄采は『朝鮮史』を台本に『東国史略』を著したのだが、その目次は以下のようなものである。

14) 学部編集委員職から解任された理由については、玄采が排日思想を持っていたためと見なす見解もあるが、国権の強奪以降学部での国史教科書編纂の必要がなくなったからであり、玄采の『新纂初等小学』の目的が日本の支配体制に順応する人間の育成にあった点、日本の警察を敬愛する存在として記述した点からも彼が排日思想をもったとは思われない。朱鎮五（1994）「金澤栄・玄采」『韓国の歴史家と 歴史学（下）』창작과 비평사, p.41

15) 金容燮、前掲論文、pp.427-428

16) 金麗沘（1982）「開花期 国史教科書を 통해 본 歴史認識（Ⅱ）」『史学志』16、p.750

17) 玄采はすでに刊行された金澤栄の『歴史輯略』の序文を書いたが、そのなか「体制不立」といい、従来の編年体叙述を批判している。方法論的には反省したが、自ら近代的歴史叙述を試みず『朝鮮史』の訳述に止まったことは限界として指摘できるが、彼の歴史叙述に関する問題意識がどこにあったのかは明らかである。

表5 〈『東国史略』目次（韓国学中央研究所蔵本）〉

巻一（『朝鮮史』）	巻二（『朝鮮史』）	巻三（『朝鮮近世史』）	巻四（『朝鮮近世史』）
太古史 檀君朝鮮 箕王歴代 三国建国 政治及風化  上古史 三国分立 三国中世 三国諍乱及新羅興亡 隋唐来寇 百濟高句麗滅亡 駕洛任那及耽羅 支那及日本関係 新羅統一 新羅衰亡 泰封及後百濟 渤海 制度 教法文学及技芸等 産業 風俗	中古史 高麗太祖創業及成宗政治 康兆乱及契丹關係 女眞役 李資謙及妙清變 鄭李の凶逆 崔氏専権 蒙古入寇及日本役 元室の専制 辛氏凶逆及繼位 北元及明の關係 倭寇 高麗滅亡 制度 教法 文学及技芸等 産業 風俗	近世史 朝鮮記 上 四祖世譜 世宗治績 世祖靖乱 大典の制度 士林の禍及外交 壬辰乱	近世史 朝鮮記 下 滿洲入寇及講和 文化及黨争 外戚及宗親の乗権 欧美及清日の關係  〈附〉甲午後十年記事 乙未新條約 海牙事件及禪讓 隆熙時事 結論 *この〈附〉は『朝鮮近世史』にはないもので、玄采の著述である。

しかし訳述とはいっても単に直訳したものではなく、林のいわゆる「植民史観」とは異なる観点からの記述と思われる部分も数箇所ある。では、両書におけるズレのみられる箇所の内容を具体的に比較してみよう。

まずは、朝鮮史の起源の問題。『東国史略』はその始まりを檀君によるものと見なす。それに比べ『朝鮮史』は箕子が平壤を都とし朝鮮を建国したと述べ、箕子朝鮮を始祖とみる<sup>18)</sup>。これに対する解釈は『朝鮮史』は朝鮮史を中国史に従属するものとしてみる立場と言える。三国に関する記述においては『朝鮮史』は漢の郡県設置とその古朝鮮支配、百濟が隋に高句麗征伐を求めたこと、三国王統の紊乱による指導力の弱化などを強調するが<sup>19)</sup>、このような内容は『東国史略』には述べられていない。伽耶にかんする部分は『朝鮮史』が11面に渡って力説する部分で、日本兵の大伽倻鎮守、任那・伽倻・駕洛について詳述する<sup>20)</sup>。『東国史略』では駕洛および五伽耶の興亡を1面ほどで略述する。三国と中国との関係にたいして、『東国史略』は高句麗と漢・魏との関係のみを扱い、その内容も高句麗が中国の侵略を退け、領土を拡大したことに注目する。しかし『朝鮮史』は南北朝・隋・唐などとの関係を記述し、より広範な対中国関係を述べている<sup>21)</sup>。また三国と日本との関係は、神功皇后の新羅征伐など新羅・百濟の歴史上、日

18) 太古史第一章「韓国の起源」で檀君朝鮮を扱ってはいるが、「其説荒唐ニシテ遽ニ信ズベカラズ」としてその存在は否定する。林泰輔『朝鮮史』巻一、p.19

19) 林泰輔『朝鮮史』巻二、p.17

20) 林泰輔『朝鮮史』巻二、p.19-24

21) 林泰輔『朝鮮史』巻二、p.27



本の影響の多大さを論じるが、『東国史略』ではこうした対日本関係の内容は削除あるいは修正された。

## 2) 「民族主義史学」の受容

以上のように玄采は林泰輔の『朝鮮史』のもつ意味を大きく取上げ、『東国史略』を記したが、同書が『朝鮮史』に学んで「近代的歴史叙述」の方法を取り入れたとするのは、後の研究者からの評価であり、当時のいわゆる「民族主義史学」思想家からは批判の声が高かった。例えば「民族主義史学」の体表と評価される申采浩<sup>22)</sup>は1908年8月27日から12月13日まで『大韓毎日申報』に名文「読史新論」を連載・発表した。そこで彼は開花期の教科書を強く批判した。彼は「歴史がないようである」といい、「民族主義をもって愚痴な国民を悟らせる」ことを力説した<sup>23)</sup>。

「民族主義史学」の思想家と言われる申采浩や朴殷植、鄭寅普などは植民地と転落した朝鮮の現実を目にして、「民族」や「民族精神」を強調したが、その方法として古代史研究に重点をおいた。その理由は外来の影響を受けなかった固有の民族とその実体を確認するためと言われる<sup>24)</sup>。ここでは彼らの研究対象や方法論を具体的には述べないが、大体夫餘-高句麗-渤海につながる北方民族中心の歴史像を描いたことは確認しておきたい。そして彼らは朝鮮が植民地となった状況を民族精神の衰退、事大主義のせいであると批判し、民族精神の「原型」を探そうとしたのである。その際、「檀君の古朝鮮」はもっともよい拠り所であったし、1909年羅喆が創始した大宗教が1910年代から20年代前半期満州における武装抗日独立運動を精神的に支えたことも「檀君の古朝鮮」への傾斜の理由だったであろう。韓国古代史研究者盧泰敦は「植民地支配下、檀君は民族的アイデンティティーと抵抗意識の象徴」であったとし、現在も「分断の現実とグローバル化のなかで檀君は韓国民に民族的同質性とアイデンティティーをあらわす馴染のある象徴」であるといい、現在においても「檀君」「古朝鮮」に執着に近い関心が注がれる理由を説明している<sup>25)</sup>。

それでは、解放後の林泰輔あるいは玄采をめぐる議論の流れを見てみよう。

## 3) 解放以降の受容と評価

植民地を脱し、本格的な近代国家づくりに拍車がかけられた解放後、林の『朝鮮史』、玄采の『東国史略』に対していかなる評価がくだされたのか。「檀君」や「古朝鮮」への関心は、解放以降教育理念として続いた。古朝鮮の建国理念とみなされた「弘益人間」は1946年米軍政の委嘱で組織された朝鮮教育理念審議会によって教育理念として採択され、その後49年新政府の教育法制定にも継承された<sup>26)</sup>。解放以降

22) 申采浩に関する研究は数多い。丹齋申采浩先生記念事業会（1980）『丹齋申采浩와 民族史觀』は申采浩研究の成果をまとめたものである。民族主義史学を開いたという評価は以降も続く。趙東杰（1998）『現代韓国史学史』나남

23) 金興洙（1983）「韓末国史教科書編纂」『歴史教育』33、p.23。申采浩はそこで玄采の『東国史略』を直接言及してはいないが、玄采の『東国史略』が刊行されたとき内閣記録官報課の「官報」に公告が載せられ、広く知られたことは考えられる。

24) 金基承（2006）「植民地時代 民族主義史学者의 歴史認識」『내일을 여는 역사』第25号

25) 盧泰敦（2000）「檀君과 古朝鮮史에 대한 理解」『檀君과 古朝鮮史』사계절, pp.11-12

26) 鄭榮薫（2000）「檀君의 民族主義的意味」『檀君と古朝鮮史』사계절, pp.195-204、また「弘益人間」が教育理念と

南北が各々政府を樹立し、ひいては内戦をも経験し、分断が固着化した政治状況は歴史叙述にも少なからず影響を及ぼした。檀君や古朝鮮への関心は1950年代李承晩政権の一民主義とつながり<sup>27)</sup>、その後朴正熙軍事政権の「正統性探し」と結ばれるまで繰り返し再生産され、記憶から呼び起こされた。こういった流れのなかで、当然のように林泰輔の『朝鮮史』は「植民史観」の元凶と見なされた。植民史観とは、日本帝国主義による朝鮮侵略・支配を正当化するため立てられた論理で、その具体的内容は「他律性論」「停滞性論」「党派性論」「日鮮同祖論」であると言われる<sup>28)</sup>。解放後の歴史研究や歴史教育はこういう「植民史観」の克服に最大の課題と目的が置かれた。林泰輔の『朝鮮史』は韓国における近代歴史学成立に及ぼした影響という側面よりは、「韓国歴史歪曲の源流」<sup>29)</sup>とか植民史学の象徴と批判される<sup>30)</sup>。また趙東杰は同書を「民族主義史学」の発展を阻害した著書として批判しており<sup>31)</sup>、こうした傾向は比較的最近の研究においても一律的に見られる<sup>32)</sup>。玄采に対する評価もこのような林泰輔への評価の影響を受けた。彼は『朝鮮史』を祖述したことから、韓国近代史学形成に否定的だったという評価が一般的である。これはいわゆる「民族主義史学」の申采浩らにいたって「近代史学」が成立したとする見方が多いためである。また玄采の著書を模倣書と見なすか、「精神の植民化」をもたらしたという批判もある<sup>33)</sup>。しかしそれとは別に肯定的に評価する研究もあるが<sup>34)</sup>、その根拠とは、玄采が林の『朝鮮史』をまったく同じく訳したのではなかったことや、彼が檀君朝鮮を認めたこと、また任那日本府に対する説明が林のそれに比べ少ない点を「積極的」に解釈し<sup>35)</sup>、「民族主義的視覚」による著述だとする見方である。また開花期という「時代的限界」も指摘される。しかしながら肯定的であれ、否定的であれ、そこには「正しい、追求すべき歴史観」という枠が前提として想定され、その中身は「民族」・「自主」が置かれている。

最近、「統一新羅論」をめぐる論争のなか林の『朝鮮史』が再登場した。現在韓国で使われている高等学校の国定『国史』教科書で書かれてある「統一新羅」部分をみると、羅唐連合軍が高句麗・百済を滅

---

して形成される過程に関しては、鄭榮薫（1993）「弘益理念의 由来와 現代的意義」『精神文化研究』74号

27) 一民主義は一つの祖先、一つの祖国、一つの国土、一つの運命、最後に一つの指導者（李承晩）の繋がりを強調する。盧泰敦（2000）、前掲論文、pp.34-36

28) 姜萬吉（1985）「日帝時代の 反植民史学論」『韓国史学史의 研究』乙酉文化社、pp.238-240、宋讚燮（1994）「日帝의 植民史学」『韓国の 歴史家와 歴史学（하）』창작과 비평사、pp.311-317、趙東杰（1990）「植民史学の 成立過程과 近代史叙述」『歴史教育論集』13・14合輯、pp.749-750。しかしこういった「定義」から派生した問題にも注目する必要がある。例えば、「植民史観」と一律的に見なすため、当時日本の研究成果の多岐にわたる詳細な文脈を見逃すことも往々見られる。

29) 崔敏鎬（1986）、前掲論文、p.982

30) 宋讚燮（1994）、前掲論文、p.311

31) 趙東杰（1998）、前掲書、pp.120-126

32) 崔在錫（2000）「1892年林泰輔『朝鮮史』批判-古代韓日関係史를 中心으로」『先史와 古代』18号

33) 韓国学文献研究会編（1977）『韓国開花期教科書叢書16』亜細亜文化社、pp.5-6

34) 盧秀子（1969）「白堂玄采研究」『梨花史苑』8、崔敏鎬（1986）前掲論文、金興洙（1990）『韓国近代歴史教育研究』三英社、鄭灌（1996）「開花期歴史教育意識과 그 水準」『歴史教育論集』21号、尹善泰（2007）「統一新羅の発明과 近代歴史学の 成立」『新羅文化』29輯、都冕會（2008）前掲論文、など。

35) 例えば崔敏鎬は、玄采が任那日本府説を前面否定したとし、壬辰倭乱の記述が『朝鮮史』より長いことを自主的・愛国的・抗争的と解釈する。前掲論文、pp.1020-1021

亡させた後、唐軍を追い返したことをもって「統一」が成立したと記述されている。いわゆる「2段階統一論」である。韓国史研究者尹善泰はこのような記述はかつて林泰輔の『朝鮮史』によるものであり、それは前近代の統一新羅論とは異なると主張する<sup>36)</sup>。すなわち、高句麗・百済の滅亡の時点をもって統一とみなす、朝鮮前期の『東国通鑑』や朝鮮後期の『東国通鑑提綱』の見方とは異なって新羅が唐軍を追い出した時点を重視する「2段階統一論」として把握するのである。そして1920年から30年代をわたって、近代日本の積極的な「新羅文化発見」と伴いながらそうした「統一新羅論」が朝鮮知識人に定着していくと主張した。もちろんそれに対する反論もあり論争が終わったわけではないが<sup>37)</sup>、これらはこのような議論は韓国における「歴史叙述」をめぐる問題の議論として考えることが可能である。

- 36) 尹善泰、前掲論文、p.127。しかし国史の叙述がもつ問題という論者の主張には同意するが、現在『国史』教科書における「統一新羅論」を考える際、南北韓対置の状況の下、1970年代の政権の正統性探しとの連動した側面も視野に入れなければならない。韓国における歴史教育は南北対置の現実が大きく影響された。以下の表を参照されたい。

〈韓国における『国史』教科書制度の変遷〉

時期	主な内容
米軍政・教授要目期 (光復～1954)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・解放当時教材の不在により、日本語の教材を翻訳、日本史中心の内容を韓国史に置き換えたが、最小限の修正に止まる。</li> <li>・1945.12.11中等学校用国史教科書発刊（小学校用は同年10.15）震檀学会『国史教本』が基</li> <li>・1947～8 中等学校教授要目発表：歴史・地理・公民（社会生活科に遍在）：米軍政が打ち出した民主主義の普及通路・『東国通鑑』『三国史記』など、古典（歴史書）の翻訳、が、日本式教育の踏襲は免れていない。</li> <li>Cf. 崔南善『中等国史』（東明社、1947、「植民史観」による記述）</li> <li>・政府樹立以降：反共イデオロギーによる学校教育統制強化（教育法155条、157条：教授要目及び教科書に関する法令）</li> </ul>
検定国史教科書 (第1・2次教育課程 期：1954～1963/1963 ～1974)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・政府による最初教育課程の制定</li> <li>・高校：社会科の中に『一般社会』『道徳』『国史』（以上必需）『世界史』『地理』（以上選択）／『国語』『道徳』『実科』（以上国定）、『国史』『地理』『世界史』（以上検定）</li> <li>・検定教科書制度への批判提議（出版社の競争による金品収受等）</li> <li>・朴正熙軍事政権下の教育課程：反共・経済的効率性・国民精神・実践的教育の強調</li> <li>・1968年12月「国民教育憲章」頒布：国史教育に反映</li> </ul>
国定（1種）国史教科書 (第3次教育課程以降：1974～)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国史教育の強化</li> <li>・1972年国史教育強化委員会構成：学校教育を中心にした国史の中心概念選定</li> <li>・国史科目の独立化、政策教科（『社会』『国史』『道徳』）の国定化</li> <li>・1977年8月文教府（現在教科部）の基本計画発表による教科書改編作業：国定・検認定を1種・2種に分類</li> </ul>

出典：この表は金漢宗（1991）「解放以降国史教科書の 変遷과 支配이데올로기」『歴史批評』15を参照にして作成した。また1911年8月23日発布された「朝鮮教育令」は、1922.2.4、1938.3.3、1943.8.3の4次に渡り、近代朝鮮の学校教育に関与した。そしてこの時期教材としてもっとも多く使われた書籍は崔南善の著書といわれる。国立中央図書館『教科書目録：1945～1979』

- 37) 反論の内容は林泰輔の『朝鮮史』を「統一新羅論」の起源とする見方を否定するものであったが、そういった反論が歴史研究者からのものではなく、国文学研究者によるものであったことも面白いところである。金興圭「新羅統一談論은 植民史學的 發明인가」『創作과 批評』2009年、秋号。それに触発され尹善泰は同誌冬号に再反論したが、現在両氏が感情的になった部分もあり、議論は止まっている。

## 終りに

以上、林泰輔の『朝鮮史』が韓国においていかに受容されてきたか、その具体相を述べてきた。

『朝鮮史』が韓国の歴史叙述に大きい影響をもたらしたのは確かである。しかしそれ自体研究の対象というより、「植民史観」を伝達する史書として受容された。植民地時期を経たため歴史研究の最大課題は「植民史観」の克服であったが、その克服過程において、林と代表される近代日本が提示した「朝鮮像」によってその研究対象が規定され、またランケ以降の実証主義という研究方法論のわくぐみにも規定されてきた。盧泰敦は韓国古代史研究100年を顧みてそれを「民族—発展—実証」というキーワードをもって説明したが<sup>38)</sup>、これはまさに近代日本が作り上げた「朝鮮像」からの脱皮を続けてきたこと自体がそれに束縛されていることを物語る。そしてそういう方法は李成市が批判するように、近代日本が提示した古代史像自体が近代の必要性から再解釈されたこと<sup>39)</sup>を度外視し、すでに作られた「枠」のなかで議論が繰り返されることに止まるのではないと思われる。

最近は図式化された歴史叙述を批判し、一国史や単一民族神話を超える歴史叙述の可能性の模索も図られている。歴史研究において民族主義的な解釈を批判し、単一と統合という呪縛から脱することの主張<sup>40)</sup>や「国史」の叙述こそがその国の「過去」を作り出すという主張<sup>41)</sup>も、そういう問題意識からのものであろう。

林泰輔の『朝鮮史』は、開花期を生きた玄采による受容以来、受容の様相を異にしながら多岐に別れ、韓国における古代研究成果をめぐる議論、歴史叙述をめぐる問題を呼び起こすなど現在にも韓国学界の「内的省察」をはかる試金石となっている。

---

38) 盧泰敦 (2008) 「古代史100年回顧」『韓国古代史研究』52号

39) 李成市 (2001) 『만들어진 古代』 삼인, pp.23-32

40) 李根雨 (2003) 「日本学界의 韓国古代史研究動向」『地域과 歴史』13号

41) 金基鳳 (2008) 「韓国古代史의 系譜学」『韓国古代史研究』52号